

## つながりを生かした学級集団づくり

教育実践専攻・ミドルリーダー養成コース

学籍番号 18GP407 氏名 成田 幸子

### 1 はじめに

(1) なぜ、今、学級集団づくりなのか

次期小学校学習指導要領（文部科学省，2017）では、「育成すべき資質・能力」の三つの柱である「生きて働く知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力等の育成」「学びに向かう力・人間性等の涵養」や、授業改善の視点としての「主体的・対話的で深い学び」が述べられ<sup>1)</sup>、注目を浴びている。同学習指導要領解説総則編第3章第4節において、児童の発達への支援及び特別な支援を必要とする児童への指導項目が加えられ、併せて学級経営の充実について述べられていることは、さらに注目される点である<sup>2)</sup>。

県内 11 小学校の校内研修に実習として参加した際、授業の成果や課題のほか、授業者の学級経営、特に、学級集団づくりに関する話題が多く取り上げられた。

それにも関わらず、担任自らが学級集団づくりについて語ったり、互いの実践について議論したりすることは少ないのが学校現場の現状である。そこから、この“客観視しにくい学級集団づくり”が学級担任まかせになっていることにより、学級がうまく機能しない状況を引き起こしているものと推測される。

松下（2012）によれば、「公式用語としての『学級経営』『生徒指導』『生活指導』『学級づくり』『集団づくり』『なかまづくり』も、それぞれに様々であるが、共通するものも多くなり、さほど対立概念は見当たらない。」と結論づけられ<sup>3)</sup>、河村（2010）作図の共同体の特性を有する日本型の学級経営イメージ図でも、集団づくりは教育活動の全てと関わり、さらに学級経営の基軸としてその中に位置づけられている<sup>4)</sup>。

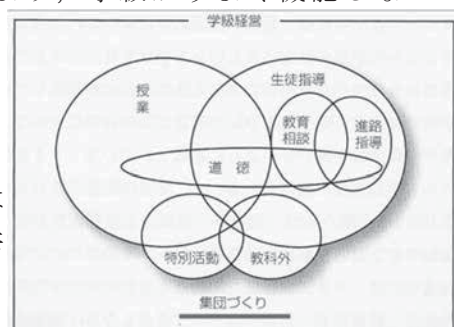


図1 「学級経営イメージ図」(河村 2010)

(2) “つながり”とは何か～“つながり”を生かす意義と課題

「今の子どもたちやこれから誕生する子どもたちが、成人して社会で活躍する頃には、・・・(中略)・・・予測が困難な時代となっている。」

これは、次期小学校学習指導要領解説総則編第1章総説の冒頭である。その中において、社会の急激な変化の中、予測困難な時代を生きていく子どもたちに、今、学校は何をすべきか、学校はどうあるべきかが問われている<sup>2)</sup>。2016年の中央教育審議会答申では、“よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る”という目標を学校と社会が共有すること、そして連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子どもたちに育む「社会に開かれた教育課程」、すなわち「社会に開かれた学校づくり」の実現を目指すことが示され<sup>5)</sup>、各校では自校の実態に応じたカリキュラム・マネジメントが行われている。

カリキュラム・マネジメントについて田村（2018）は、「学校の外とのつながりとともに学校内部のつながりを大事にすることで、社会に開かれた教育課程とチーム学校の実現を目指すことができる。」と述べ<sup>6)</sup>、著書においても「今、学校は、子供や保護者の多様性や社会の複雑性への対応が求められている。・・・(中略)・・・今こそ、教師がつながり、学

び合い、支援し合う同僚性が求められる。」(田村, 2014) と記し、学校内外のつながりの重要性を強調している<sup>7)</sup>。

また、「学びは人と人との間で起こる」と表現したロシアの心理学者ヴィゴツキーの理論を土台に、「つながり(社会関係資本) = 人間関係が生み出す力」という概念で、「つながりの再構成」の重要性について触れている志水(2014)は、その著書の中で、「結束・橋渡し・連結」の3つのタイプの社会関係資本が、継続的かつダイナミックに増殖している中で、子供たちの学力は着実に下支えされている。」とし、「つながり」を生かした「力のある学校」について述べている<sup>8) 9)</sup>。

以上の両者の学術的な理論を踏まえ、本研究における“つながり”とは、志水のいう社会関係資本に依拠しながら、第一に「人と人のつながり(特に、児童相互と児童と学級担任との学級目標実現に向けたかかわり、及び、教職員相互の学校教育目標実現に向けたかかわり)」、第二に「学校内外の教育資源のつながり(主にその活用)」に整理して考えることとする。

学級担任の学級集団づくりにおいて、これらの“つながり”を生かした教育実践をすることは、「開かれた学級づくり」や「開かれた学校づくり」への発展と、「チーム学校」の実現に向けても重要と考える。しかしながら、志水がいう「気持ちのそろった教職員集団」<sup>9)</sup>のように、“つながり”は可視化しにくいという課題を併せ持つ。

## 2 研究の経過

### (1) 本校の現状と課題

市内の中心部に位置し、創立約1世紀半を迎える本校は、歴史と伝統を学校の誇りとして継承しつつ、今の時代に求められる資質・能力の育成と学校課題の解決のため、学年部会と分掌部会が設定されている。今日的教育課題でもある、学力の二極化や生徒指導の多様化・複雑化等は本校にも当てはまり、学校課題となっている。そのため、学年部会は学年裁量で随時開催され、3部会制による分掌部会も定期及び必要に応じて開催されている。本校の学年及び分掌といった組織体制が整っていることは、本校の強みであるが、互いの学級が情報を共有し協働するという観点では課題がある。

文献を中心とした1年次における研究の方向性が、2年次の本年度において本校にとって意義あるものかどうかを検討するために、職員会議及び児童理解会議における本校教員の情報発信から、本校教員が抱える教育課題の分析を年度当初に実施したところ、児童の指導に困り感を抱えている事例が多いことがわかった。中でも、学習に関する困難さよりも、友だちとの関わりにおけるトラブルや、多様なニーズをもつ児童の対応や支援に悩んでいる担任が多く、学級集団づくりへの苦労が多く語られていた(図2)。

また、本校教員は教職経験年数も豊富であり、本県の教員の資質に関する指標に当てはめると、教職経験概ね16年以上の充実期にあたる教員しか在勤していないということは、教員個々の指導技術は高く本校の財産の一つとなっている。反面、授業づくりや学級集団づくりを磨き合い協働・連携すること、そして同僚性を発揮することにおいては課題がある。

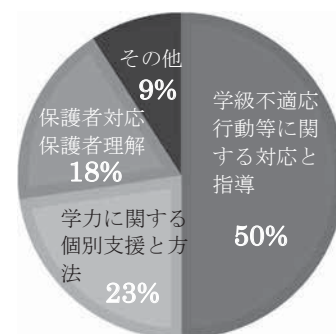


図2 本校の教員が抱える教育課題(困り感) (調査人数20名)

(2) 研究の構想

本校の現状と課題から、学級集団づくりをテーマにした本研究は、本校にとっても意義があるものと結論づけ、実践研究をすることとした。なお、全学年複数学級編制の本校において、本研究は、学校内外の“つながり”を生かすことに焦点を当てた研究であることから、他学級や他学年にとっても汎用性があると考えられる。よって、本校が目指す今年度の児童の姿を具現化し、そして、担任する学級の児童の実態と児童の声を踏まえ、学校内外のつながりを生かした協働による開かれた学級集団づくりの視点を大事に、以下のように研究を進めることとする。

〈研究主題〉

つながりを生かした学級集団づくり

〈研究目標〉

“みんながハッピーになる”（安心・安全・居場所がある）学級集団の育成を目指して、学校内外の多様な他者とのつながり（同僚性と専門性）を生かした協働による学級集団づくりをする。

〈研究仮説〉

児童の声や思いを中心にしながら、同僚性と専門性の両視点を生かした協働による学級集団づくりをすれば、児童の不応行動や学級担任の困り感は減り、みんなが安心して学校生活を送ることができるだろう。

〈研究方法〉

学級集団づくりにおける実践記録（主に授業づくりとその省察及び抽出児童の行動記録の分析）と同僚職員へのインタビューや会話記録の分析等による、質的な検証方法で研究を行う。

〈研究対象学級の実態〉

児童数 33 名。個別の指導計画を作成し、合理的配慮による指導をしている児童数は、特別支援学級在籍児童を除く 30 名のうち 6 名。

〈研究の重点〉

- ① 教員同士のつながりを可視化するためのカリキュラム・マネジメント
- ② 教員同士のつながりを生かした体制の構築を目指した実践
- ③ 児童と児童／児童と学級担任／児童と教材／児童と地域社会がつながる授業の構想
- ④ 外部資源の活用・・・専門性

同僚性

〈本研究におけるエビデンス〉

- ① 「児童の声・意識調査に基づく『魅力ある学校づくりプラン』4 件法による質問紙調査結果
- ② 3 名の抽出児童（A 児：対人関係における行動面に配慮を要する／B 児：情緒面に配慮を要する／C 児：学習面に配慮を要する）の観察と行動記録
- ③ スケール法による担任としての困り感の日常記録

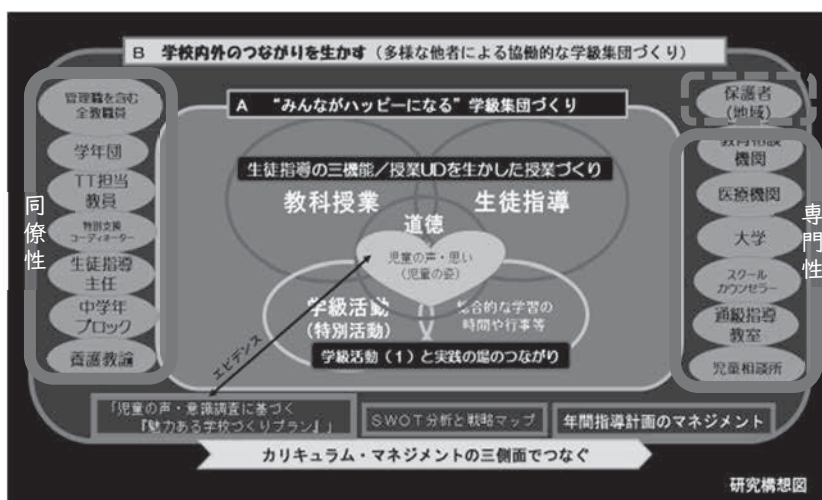


図 3 本研究構想図

### 3 実践と取組

#### (1) 教員同士のつながりの可視化～カリキュラム・マネジメントを通して

“人と人のつながり”は見えにくい。教員同士のつながりも同じである。教員同士の見えにくいつながりを、本研究では「カリキュラム・マネジメントの3つの側面」(中教審答申, 2016)<sup>6)</sup>を用いて可視化させることにした。

志水のいう「力のある学校」におけるスクールバスモデルのエンジン部分である気持ちの揃った教職員集団<sup>9)</sup>を実現するためにも、見えにくい“つながり”を可視化させることにし、以下の取組を実践した。

##### ①学年団がつながり合うための学年児童のSWOT分析及び戦略マップの作成

多様なニーズをもつ児童が多く在籍する本学級の集団づくりにおいて、学級担任一人の視点だけではなく、多様な他者の視点を生かすことが本研究でいう「つながりを生かす」の一つである。そこで、学年部会を開催(4月3週目と4週目)し、学年児童の強みと課題を整理し、学年の戦略マップを共同作業することで、学年集団の目指す児童像だけでなく、誰がどのような役割で学年を運営していくのか、生徒指導上の困難さを抱える児童に学年団としてどうかかわっていくのかをシート上に可視化させ、学年経営と学級集団づくりをつなげ、学年団のビジョンとゴールの共有を図った。

##### ②教科横断的視点による単元配列表の作成

田村は、「学年団で年間指導計画等をマネジメントツールとして使用し、作成・修正をすることは、学級間の足並みを揃えるだけでなく、学級を超えた児童同士のつながり、担任同士のつながりが生まれやすくなり、児童の資質・能力の育成につながる。」(2014)<sup>6)</sup>と述べている。

そこで、学年の単元配列表を私案し、学年部会を開催(4月4週目)した。各教科や単元および行事においてどんな力を身に付けさせるのか、そのために何をすべきか等、児童の資質・能力の育成のために児童の姿を中心にした教科横断的視点で話し合いをし、私案の単元配列表に学年団で加筆した。

##### ③学年団による「児童の声・意識調査に基づく『魅力ある学校づくりプラン』」の作成

本市の全小中学校で実施されている、「児童の声・意識調査に基づく『魅力ある学校づくりプラン』」を活用し、児童の声・意識調査結果の変容を、学級集団づくりに関するエビデンスとして学年団で分析・協議することは、互いの学級集団づくりと学年経営、さらには、学校教育目標とのつながりを強固にすることにつながるのではないかと考え、学年児童の学びの姿における課題克服を目指し、本校校内研修の方向性となげながらプランの作成を学年団で行った。(5月3週目)

#### (2) 教員同士のつながりを生かした体制の構築

##### ①一部教科担任制による授業づくり

理科と音楽の授業において教科担任制を導入し、学年に配属されているTT担当教員がT1、学級担任はT2として授業実践をしている。学年配属のTT担当教員の強みを生かした授業づくりは、児童の学びを支えるとともに、学級担任がT2の立場で客観的に児童や学級集団を見る機会を必然的に得ることにつながる。そして、学級担任自身の授業改善や学級集団づくりにおけるPDCAを短いサイクルで回すことにもつながっている。また、T1との授業の打合せを通して、教員同士のつながりが強固になり、チームで学級集団を育てようという意識向上が図られている。

〈理科の授業後のT1との授業省察〉会話記録より

- T2 「45分座っていることが難しいA児。いつもだったら、15分くらいすると離席をして周りの子にちょっかいを出し始めるけど、理科の植物のイラストをノートに描く活動で、集中して取り組んでいましたね。すごい。」
- T1 「A児は、作業が得意なんじゃないかな。A児は、思ったことを場の様子を考えずに発言してしまうけど、私もA児の困った行動としてしまわずに、いいところに目を向けて指導していきますね。」
- T2 「A児のいい変化は、周りの子たちのA児に対する理解があってこそのもので、周りの子たちの成長がすごいということにもつながりますね。」
- T1 「ほんとうに周りの子たちが頑張っているね。A児を否定する子がいないことはすごいこと。前は違ったのに。成長しているね。そこを褒めていこう。」

②同じ困り感を共有する学級担任との自主学習会の開催

特別支援コーディネーターY教諭を中心に、学級集団づくりに悩みを抱えるX教諭と協働し、自主学習会を開催（6月1週目）した。X教諭と普段の学級集団づくりや授業づくりで悩んでいることを共有し、後日、筆者の学級で自主公開授業を行い、授業協議会を行った。その後も、Y教諭と協働しX教諭に対する何気ない声掛けを意図的に続けることで、学級集団づくりの困り感を共有し合う関係を保っている。

〈学級集団づくりに困り感を抱えるX教諭の気付き〉協議記録より

- ・A児のじっとしてられない特性を生かして、ミニ先生役を与えることでA児の特性が困った特性ではなく、学級みんなのためになるA児のよさに変身した。
- ・担任が集団の行動や言動を全て肯定的に受容し、価値付けていた。騒いでいる子に目を向けるだけではなく、ちゃんと頑張っている子に目を向けて価値付けていきたい。
- ・学級みんなで助け合って授業をしていた。わからない子が「わからない。」と言うことができ、みんなの力を合わせて課題解決していてすごかった。こんな風に、児童が教室中を動いて助け合ったり教え合ったりできるから、みんなで勉強するのは楽しいのかも知れない。

(3) 児童と教材／児童と児童／児童と学級担任／児童と地域社会がつながる授業の構想

①授業のユニバーサルデザイン化と生徒指導の三機能を意識した協働的授業づくり

栗原は、「援助ニーズの大きい三次的支援の対象者に対しても、一次的支援や二次的支援が基盤になる。」と述べている<sup>11)</sup>。そこで、多様なニーズの児童が在籍している対象学級では、授業のユニバーサルデザイン及び生徒指導の三機能を大事にしながらの授業づくりをすることにした。授業を通して個と個がつながり合い集団へと成長していく授業を目指し、同じブロックの同僚とともに取り組んだ。

i) 実際の国語の授業から（実施日時 201X年9月19日5校時）

単元名 お話ギフトボックスを作って 物語をしようかしよう  
 教材名 わすれられないおくりもの（教育出版 3年上）読むこと

本時の目標

- ・これまでの学習や叙述を基にしながら題名の意味を考え、交流を通して気付いた物語の主題を、エピローグ風にギフトカード⑥に書くことができる。（Cオ）
- ・交流を通して、互いの考えの違いやよさに気付くことができる。（Cカ）

ii) 授業後の考察

ア) 児童のふりかえりシートの分析結果（回答児童数29名）

授業が「わからなかった・できなかった」という児童はなし。学習面で配慮を要するC児も「わかった・できた」と回答。単元を通して、「わからなかった・できなかった」という児童数は減っていった。

表1 児童用授業ふりかえりシート集計結果

今日の国語はよくわかった・できた	◎	21人
今日の国語はわかった・できた	○	8人
今日の国語はわからなかった・できなかった	△	0人

## イ) 児童の振り返りコメントより

- ・○○さんの考えがすごいと思った。お話の森のみんなのように、力を合わせてがんばっていきたい。
- ・今日のべんきょうで、あなぐまから森のみんなへの心のおくりものがわすれられないおくりものなんじゃないかなと思った。友だちの考えも知れてよかった。
- ・森のみんなと死んだあなぐまはずっとつながっていると思う。○○くんが言っていた愛というのが心にのこった。

児童は、単元を通して「教材へのつながり」を深めてきた。児童の振り返りコメントからは、「友だちとのつながり」「みんなとのつながり」「自分自身へのつながり」に関する気付きが多く書かれていた。

## ウ) 授業参観シートの集計結果より

(回答教員数 15 名)

授業参観シートを用いて、全教員に授業を参観してもらった結果、どの項目も「とても当てはまる」「当てはまる」の割合が高かった一方で、「あまり当てはまらない」という回答結果が得られた 4 つの項目（みんなで何かをする場面はあるか／児童が主役になっているか／児童と教材のつながりはあるか／児童同士のつながりはあるか）に関して、ブロックで授業省察会を実施した。この授業省察会の後に、同ブロックの他学級職員による授業研修会を実施した。

つながりという視点で授業を参観し合い、授業によって児童同士をつなぐこと、授業を通して児童同士がつながり合うことを大事にした授業改善について協議した。

表 2 国語「わすれられないおくりもの」授業参観シート集計表

	当てはまる	当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
① 児童が、授業は楽しいと感じることができる工夫をしている。	11	4		
② 学級のみんなで何かをする場面が授業にある。	9	5	1	
③ 児童が、授業に主体的に取り組めるような工夫をしている。	10	5		
④ 児童にとって“わかる”授業となるような工夫をしている。	5	10		
⑤ 児童が自己決定をする場面が授業にある。	5	10		
⑥ 児童が主役となるような授業づくりをしている。	6	8	1	
⑦ 全員参加の授業づくりをしている。	10	5		
⑧ 児童と教材とのつながりがある授業づくりをしている。	8	6	1	
⑨ 児童同士のつながりがある授業づくりをしている。	11	3	1	
⑩ 児童と教師のつながりがある授業づくりをしている。	13	2		
⑪ 集団づくりと授業づくりのつながりがある。	12	3		

## ② 児童と児童／児童と学級担任がつながるための学級活動 (1) の充実

文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター(2014)は、「集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせながら、児童がよりよい自分や学級・学校生活、人間関係をつくる活動を通して、共生社会でよりよく生きる力を獲得することができる学級活動 (1) の充実が、よりよい集団の育成に結びつく。」と述べている<sup>11)</sup>。

そこで、上記 (1) ② 学年の単元配列表には、児童が自ら見出した学級の課題について話し合えるように、ゆとりのある計画づくりを行い実践している。また、良好な人間関係育成を目指した活動を、児童の見出した学級の諸問題と関連させながら児童裁量の視点で議題を設定し、実践している。

## (4) 外部資源の活用～大学／行政／医療現場とのつながりを生かした実践

担任する学級に在籍する A 児への対応について、学年部会・ブロック部会・ケース会

議を経てきた。A児に対して学校がチームで対応していくために、客観的な第三者の視点を学級集団づくりに生かし、保護者とともA児の抱える問題を外部の教育資源とつなげて大きなチームになって協働しながら対応している。

表3 大学教員の来校日及び指導・助言内容と担任の困り感（一部抜粋）

月	日	A児の気になる行動等	担任の困り感 (10段階スケール)	大学教員による指導・助言内容
5	30	離席や叩く蹴る行為があり授業成立が難しい。A児が悪者になっていきそう。A児の不応行動を減らし学級にとって必要な子として周囲に認識してもらえようにするにはどうすべきか。	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	担任が困った表情をした時と「先生は困っているよ。」と伝えた時に、A児は反応を示した。ソーシャルストーリーを活用してはどうか。授業でA児を活躍させる場面を設定するとよい。
6	13	授業は成立し始めたが友だちを叩く蹴る等の行為が多発している。周囲の状況や他の子の気持ちを理解することが苦手。	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	気持ちの言語化を意識する。コミック会話法を使ってみる。どんな代替手段が使えるか探してみる。環境と関係の調整をする。
7	5	他学級児童とのトラブルが頻回。学級ではトラブルは減っている。A児は「ごめんなさい」ができるようになった。	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	学級内の環境調整がうまくいきはじめた。周囲の子もA児の気持ちをくみ取れるようになってきている。刺激や違和感が弱いため、気になる人・事に手や口も出ている。
7	9	A児は自分の気持ちを伝えるようになってきた。気持ちがうまく伝わらない時には、涙が流れるようになってきた。保護者面談の切り口をどうするか。	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	保護者との昨年度までの記録や先生方からの聞き取りで整理する。感情の器が認識されはじめてきたかも知れない。このままキーパーソンとして対応する。
9	19	学級もA児もとてもいい状態である。隣の学級とA児との関係が心配。隣のクラスが気になっているようだ。	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	隣の学級にA児が気になるものがある。学級の雰囲気などにも敏感なため、自分の学級との違いを感じ取っている。隣の学級にも介入を試みる。
10	8	学習発表会の全体練習場面で不応行動が頻回。保護者と第三者としての大学教員との教育相談について進めていきたい。	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	A児にとって練習は苦痛。他児の理解を得ながら練習中の環境調整をする。教育相談について保護者の了解後日程を調整。
11	26	大学教員による父親との教育相談を実施。		
12	18	暴言はあるが叩く蹴る等の行為がなくなったことは最大の成長。保護者も協力してくれている。	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	A児との個別教育相談実施。やっはいけないとわかっているが出てしまう。具体策と一緒に考えていく。

#### 4 調査結果と考察

①「児童の声・意識調査に基づく『魅力ある学校づくりプラン』」4件法による質問紙調査結果の比較・分析から（図4）（図5）

7月実施時では、「イ みんなで何かをするのは楽しい」において、「どちらかといえば当てはまらない」及び「当てはまらない」の割合が他の項目に比べて高い。そして、「エ 授業がよく分かる」において「当てはまらない」の割合が高く、「授業が分からない」と感じ、授業において困っている児童がいることが分かった。

教育相談で児童の声を実際に聞いてみると、「みんなで何かをするよりも自分一人でやった方が楽しいうまくできる。」「トラブルになってうまくいかない。」という経験を話す子が数名いた。アンケート結果から、授業が分からないと感じている児童もいることから、児童の声に耳を傾けた授業改善が必要であり、授業や諸活動の中に「みんなで何かをしてうまくいった。楽しかった。」と思えるようなしかけをする必要があると考え、学年団で学年のビジョンとゴールの再考と、学習発表会と国語・音楽・学級活動を軸にした教科横断的視点を大事にした単元指導計画を作成し、実践した。

結果、12月実施時においては、どの項目も肯定的な回答が増えた。特に、7月に課題として残された「イ みんなで何かをするのは楽しい」「エ 授業がよく分かる」の項目で「当てはまらない」と回答した児童はいなかった。7月の結果を受け、学年の話し合いや助言、そして、同僚職員による学級に在籍する児童への休み時間の意図的な声掛け等が数値向上につながったと考えられる。

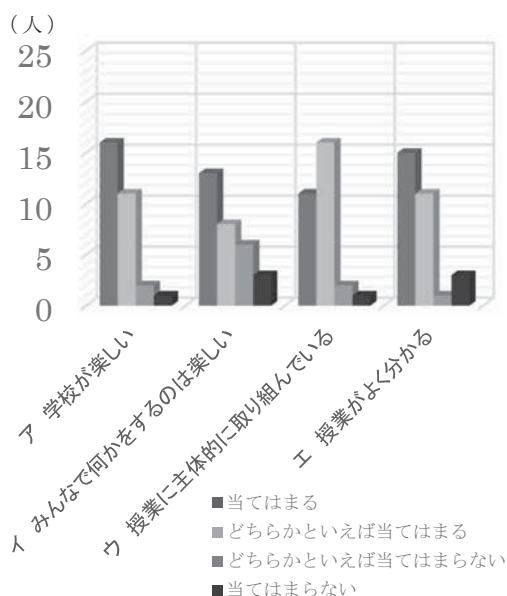


図4 「児童の声・意識調査」  
(7/12実施 回答児童数32名)

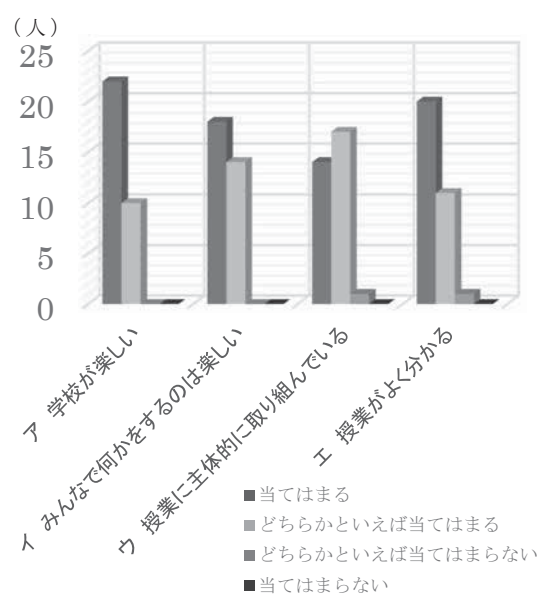


図5 「児童の声・意識調査」  
(12/23実施 回答児童数32名)

②3名の抽出児童（A児：対人関係における行動面に配慮を要する／B児：情緒面に配慮を要する／C児：学習面に配慮を要する）の気になる行動記録から

3名の抽出児全員の気になる行動等が減少した。特に、対人関係における行動面に配慮を必要としていたA児においては、叩く・蹴る等の行為数と授業中の離席等の数は大幅な減少を見せ、授業で活躍することも増えた。B児もまた、授業中における情緒面の不安定さはなくなり、授業で黙々とノートをとるようになった。C児においては、学習面でできるようになったことも増え、授業における個別支援回数も減少。特別支援コーディネーターや特別支援学級担当教員との情報共有や助言等を生かし、特別支援の視点に立った授業改善と、人的環境調整が気になる行動の減少につながったと思われる。

表4 抽出児童の気になる行動数

		4～7月	8～12月
A児	叩く・蹴る等の行為数	52件	14件
	授業中の離席等の数	49件	9件
B児	情緒面の不安定さから授業参加できなくなった回数	11回	0回
C児	授業中の個別支援の回数	101回	79回

③スケール法による担任としての困り感の日常記録から

表3から、6月をピークに前期前半はスケールが最大値に近いことが日々多かった。一方、年度初めの4月の困り感は思ったほど高くはない。これは、児童との出会いの4月は実態把握期であり具体的な実践はまだできないため、担任としての困り感は高くないと考える。また、長期休業を挟み8～9月のリスタート期も困り感とは他と比較して高くはない。それは長期休業により、学級集団づくりの実践をPDCAサイクルで省察する時間が確保され、児童の実態に応じた指導や支援を具体的に講ずることができたためと考える。



また、スケール法による困り感の結果（表 3）から、大学教員による指導・助言により学級担任の困り感が軽減されたことがわかる。特に、11月の大学教員による父親との教育相談後はその効果が顕著に表れた。これは、改善に向けての手立てを常に見直し更新していった短期PDCAサイクルの成果であると言える。

## 5 研究のまとめ

### （1）成果

#### ①学級とブロック教員団双方の集団としての成長

研究対象学級は、個と個がつながり、みんなと学ぶことの楽しさや心地よさを味わいながら、互いの違いを生かし合う学級集団へと成長している。また、同僚と学級集団づくりについて省察したり情報交換をしたりすることによって、協働意識の醸成と互いの学級が抱える問題共有へとつながり、学級担任の困り感を軽減する一つの手立てになり得ると考える。ブロックの教員間にも互いの強みや弱点を理解し合い、互いに支え合っていこうとする関係性が構築されてきた。

#### ②児童の特性に応じたつながりと授業づくりと学級集団づくりの相乗効果

多様なニーズの児童が在籍する通常学級での学級集団づくりにおいて、特別支援コーディネーターや特別支援学級担当教員のつながりは、児童の特性理解と適切な支援提供という観点において重要であることが明らかになった。

また、授業を通して児童相互のつながりを意図的に生み、人的環境を整えることは、配慮を要する児童の気になる行動数の減少に有効だ。児童相互のつながり場面を意図的に設定することは、配慮を要する児童だけでなく全ての児童にとっても、教師支援と友だち支援の両支援を受けることにつながり、授業づくりと学級集団づくりの相乗効果が狙える。

#### ③児童を中心とした同僚性と専門性を生かしたPDCAサイクルの好循環

多様なニーズがあり三次的支援が必要となる学級では、同僚性ととともに専門性を生かした指導が有効である。第三者の客観的な児童アセスメントや集団分析は、担任のPDCAサイクルを好循環させるのに役立ち、ブロック団との何気ない会話や学級児童に関する情報提供が、新たな手立ての構築及び実践と省察へとつながる。

### （2）課題

#### ①つながった後のマネジメントの必要性

教員同士のつながりを生むためにカリキュラム・マネジメントの手法を用いたが、つながりができた後にそのつながりをどのように育み、同僚性として発揮していくのかという新たな課題が生まれた。

#### ②多種多様なつながりの整理と活用

本研究では、担任が学級集団づくりを行う上で同僚とのつながりと外部資源とのつながりを生かすことに焦点を当てて実践研究をしてきたが、学級集団づくりは学校教育全般を通して行われることを再確認することができた。それとともに、児童を取り巻く環境には異種多様なつながりがあり、児童一人一人のニーズによって、生かすつながりは異なるだろう。学級集団として成長していくために必要なつながりを整理し、児童や学級の実態に応じて活用することが求められる。

#### ③保護者とのつながりの位置づけ

本研究では、同僚性と専門性のつながりに大きく分類して取り組んだが、実践を

通して、保護者とのつながりは学級集団づくりを行う上でたいへん重要だと気付いた。保護者とのつながりをどちらに分類すべきか明確にできないまま実践してきたのだが、同僚性と専門性ととも保護者のつながりを学級集団づくりにどう生かすか、新たな課題が得られた。

## 6 おわりに

個が集まった集合体から学級はスタートする。学級が、集合体から集団へと成長していく営みや過程に、多様な他者の視点やつながりを生かすこと、つまり、同僚性と専門性を生かした協働による学級集団づくりは、学級がうまく機能しない状況を防ぐことにつながるとともに、児童にとっても教師にとっても支えとなるものなのではないだろうか。本研究を通して強く思ったことは、児童同士、教員同士、児童と教員が“つながる場所こそが学校”なのだという事だ。

時には、“つながることの難しさ” “つながってからの難しさ” とぶつかることもあった。その度に、「教師とは何か」「学校とは何か」「児童にとっての幸せとは何か」といったとてもシンプルな問いに戻っていった。その問いを自問自答しながら、そして、同僚職員とともに議論しながら日々実践を重ねてきた。学級集団づくりは担任一人で行っていくものではない。全教育活動を通して、児童とともに、そして多様な他者とともに歩いていくものである。その集団づくりにおいて大きな壁が立ちはだかった時に、ともに壁を登ってくれる同僚がいること、手をつないでくれる誰かがいることが、担任だけでなく児童にとっての幸せへとつながるのではないだろうか。

本研究を通して得たミドルリーダーとしての気付きは、「学級集団づくり→学年集団づくり→学校づくり」へと発展させていくことにおいても重要であろう。“つなぐ・つなげる・つながる”視点をもち、今後も、ミドルリーダー自らが多様な他者に学び続けていくこと、それこそが「学び続ける教員」の一つの姿であり、「つながりを生かす」ということなのかも知れない。

最後に、本研究にご協力いただきました皆様に心から感謝し、厚くお礼申し上げます。

## 参考・引用文献

- 1) 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示)』
- 2) 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説総則編』
- 3) 松下一世 (2012) 『「集団づくり」論の推移—人権の視点からの再考—』佐賀大学教育学部研究紀要
- 4) 河村茂雄 (2010) 『日本の学級集団と学級経営』 図書文化
- 5) 中央教育審議会 (2016) 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について』(答申)
- 6) 田村知子 (2018) 学校組織マネジメント指導者養成研修における講義内容の一部から
- 7) 田村知子 (2014) 『カリキュラムマネジメント—学力向上へのアクションプラン—』 日本標準
- 8) 志水宏吉 (2014) 『「つながり格差」が学力格差を生む』 亜紀書房
- 9) 志水宏吉 (2003) 『公立小学校の挑戦「力のある学校」とはなにか』 岩波書店
- 10) 文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター (2018) 『みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる 特別活動小学校編』
- 11) 栗原慎二 (2017) 『MLA マルチレベルアプローチだれもが行きたくなる学校づくり』ほんの森出版